



TITLE:

<Book Review>T. H. Silcock and E. K. Fisk (ed.), The Political Economy of Independent Malaya, A Case-Study in Development, Eastern University Press Ltd. and The Austrlan National University, Singapore and Camberra, 1963

AUTHOR(S):

本岡, 武

---

CITATION:

本岡, 武. <Book Review>T. H. Silcock and E. K. Fisk (ed.), The Political Economy of Independent Malaya, A Case-Study in Development, Eastern University Press Ltd. and The Austrlan National University, Singapore and Camberra, 1963. 東南アジア研究 1965, 2(4 ...

ISSUE DATE:

1965-03

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/55002>

RIGHT:

地域事務局に農業経営専門家として勤務する翁博士が、「やっと昨日20部だけ刷りあがりました」といって、ワカバンコク連絡事務所にとどけてくれた。

いうまでもなく、タイの主産物は米であり、国民の80%を占める農家はほとんどが米作に依存している。ところが、これだけタイにとって重要な米について、まとまった文献がこれまでひとつもなかった。翁博士は、FAOの本来の仕事の余暇に、タイ国農務省次官補であり、同時にタイ国農業経済学会の会長である Sawaeng Kulthongham 博士と協同して、タイの米穀経済の概況をここにまとめあげられた。そして、従来かなりのタイ語ならびに英語での調査研究を出版している農務省次官室農業経済課から刊行された。

わたくしは、さっそく一読したが、これまでのタイ国の官庁報告や官庁統計をもととし、それに国連関係の国際的統計の助けもかりて、タイの米穀経済の特徴と諸問題とその見とおしおよび対策を、きわめて要領よく、まとめあげている。

すなわち第1部は米の重要性を、米の作付面積・生産高・雇傭人口・国民摂取食糧・輸出・財政収入の6つの面からうかびだす。

第2部は米のもつ問題点として、栽培時期・収益力・土地生産性・需要弾力性・流通機構および伝統的栽培方法を取りあげる。

第3部では、米の長期的動向が予測される。すなわち、国内需要・国外需要を予測し、あわせて供給の予測を行ない、米の見とおしが需要・供給の両側面からして明るいことを強調する。

第4部は、その明るさを実現するために米の生産・流通面での改善が必要だし、その方向を明らかにする。とくに米栽培方法の改善、2毛作の導入、米作と他作物との結びつき、農家をして改善方策を受けいれさせる手段をのべる。

したがって、タイの米作にかんする経済的・経営的な側面を、ほぼおおっている。もちろん、これで全部が尽されたのではない。とくに改善実現対策として問題となるタイ国の低米価政策あるいは米輸出税の問題、あるいは米作のための資材価格と米価との、いわゆる input-output の価格関係の問題に、意識的か無意識的にか、深い注意の払われていないのは遺憾である。しかし、著者の立場からすると、これにつっこむこと

ができないことも、わたくしには理解される。

たとえ、重要問題のうち見のがされたものがあったり、官庁報告にたよる結果つっこみが少ないところがあるとしても、タイ国の農業はもちろん、広く経済の最も重要な中枢部門をなす米の経済についてのこうしたまとまった形での研究が出版されたことは、非常によろこばしい。官庁出版物であり、印刷部数も1000部とかざられている。ここに、広く紹介するとともに、激務のかたわら、本書をまとめあげられたサウエン博士とオン博士に心から敬意を表したい。(本岡武)

T.H. Silcock and E.K. Fisk (ed.) : *The Political Economy of Independent Malaya, A Case-Study in Development*, Eastern University Press Ltd. and The Australian National University, Singapore and Canberra, 1963.

マレーシアは、東南アジア諸国のなかで、資源に恵まれ、旧英領時代の行政・教育・交通・衛生等の植民政策の遺産をうけつぎ、1人あたり最高の国民所得を享受している。したがって、後進国のなかでは、経済発展のための、きわめて有利なスタートにたっている。だが、その反面、マレー系と中国系、加えてインド・パキスタン系との人種問題、スズとゴムとのふたつの一次産品に依存する経済、あるいは1963年9月のマレーシア独立後のインドネシアとのコンフロンテーション（対決）など、いくたの、頭のいたい問題をかかえている。

最近、東南アジアにたいするオーストラリアの関心はいちじるしい。そのひとつの表われとして、キャンベラのオーストラリア国立大学でのアジア研究は急速に進歩してきている。ここの新設のResearch School of Pacific Studies がその中心となっているが、この研究所が1962年に T.H. Silcock 教授を中心として、マラヤ経済のセミナーをもった。本書は、そのセミナーの報告書である。

まず、マラヤ経済についての大家である Silcock マラヤ大学名誉教授が、マラヤ経済の大きな枠としての社会的・政治的構造を明らかにする。このうち、とくに独立後のマレーシアの政治構造を、Emily Sadka 女史が述べる。同じく、経済の背景としての人種・人

口問題を J.C. Caldwell 博士が分析する。

ついで経済問題にはいり、オーストラリア国立大学の Professional Fellow の J.C. Caldwell 博士が、マラヤの輸出貿易とマラヤの国際収支との2編を提出する。Agricultural Development Council のクアラルンプール駐在 C.R. Wharton Jr. 博士は、とくにマラヤ主産物のゴムの供給条件を分析し、若干の政策を示唆する。オーストラリア国立大学の Senior Fellow の E.K. Fisk 氏は、マラヤにとって重要問題である農村開発問題を取りあげる。オーストラリア準備銀行の D.G. McKenna 氏は、マラヤ中央銀行創設のための援助の経験にもとづき、マラヤ連邦独立後の金融・財政の発展を説明する。シドニー大学の Senior Lecturer の E.L. Wheelwright 氏は、マラヤの工業化の過程をあとづける。そして、最後に Silcock 博士がマラヤ経済政策を要約される。

付録として、Silcock 博士による国民所得の人種間の配分の推測と、Cordon 博士とオーストラリア国立大学の Research Assistant の H.V. Richter 氏とによるマラヤの貿易統計および仲継貿易なる論文がおさめられている。

以上の内容によって明らかなように、マラヤ経済の諸専門家が、マラヤ経済の重要問題をそれぞれの専門からとりあげており、いわば、かなり包括的な論文集である。その論文のそれぞれについては、問題の余地があろう。しかし、全体としてみると、マラヤ経済、あるいはマレーシア経済の数少ない入門書のひとつである。同時に、比較的恵まれた後進国の経済発展についての、まとまった case-study である。少なくとも、マラヤ経済研究のためには、ぜひとも一読されなければならないものである。(本岡武)

André Mousny: *The Economy of Thailand, An Appraisal of a Liberal Exchange Policy*, The Social Science Association Press of Thailand, Bangkok, 1964. 280p.

東南アジア諸国のなかでのタイ経済の特徴は、為替相場の安定、堅実な経済成長にある。この特徴がどうして生まれたか、この基本的な問題を真正面からとりあげ、それが自由な為替管理政策にあると結論づけたのが本書である。

著者ムーニイ博士は、東南アジアにおける為替管理

政策の実際的な専門家である。まずサイゴンおよびプノンペンでのインドシナ為替管理局の管理官を3年つとめ、インドシナの通貨ピアストルの相場についてのすぐれた研究を発表した。ついでビルマにうつり、フランス大使館商務官として4年勤務。1960年はじめ、さらにタイにうつって、今日に至っている。すでにこれら諸国の経済事情についてすぐれた論文を *Far Eastern Economic Review* や *Eastern World* に発表しているが、3年前に SEATO の文化関係プログラムのフェローシップをうけて、まとめあげたのが本書である。

本書は、きわめて、よくまとまった形をとっている。すなわち、第1章では、戦時の1942年から始まって、1963年に至る間の、この国の為替管理政策の形成、発展を要説する。これをうけて、第2章では、1963年末現在における為替管理の概要を基本方針・輸入管理・輸出代金・通貨と送金・金の規則等について、まとめる。第3章はタイの輸出について、為替相場の影響・一定期間内での受取外貨の販売・国別輸出・業者別輸出などを、第4章はタイの輸入について、輸入の増大、国別輸入・商品別輸入・輸入業者などを考察する。ついで第5章をタイの財政政策にあて、通貨政策・予算・国内債および金融部門の概要をつかむ。第6章はタイ通貨の安定性の貢献にきわめて重大な役割をはたしてきている諸外国や国際機関からの財政的援助を評価する。この章は、タイ国経済の理解のための重要なポイントである。ついで、第7章では、タイの通貨バートの価値が、貿易収支、対外収支、1947~62年間の為替レートおよび外貨保有等の視点から分析され、自由な為替管理政策が外国からの投資をまねき、さらに為替相場の安定の要因となっていることを明らかにする。最後の第8章では、タイの経済発展、第9章では国民生活水準の上昇を示し、これが自由主義に負うところの大きなことを明らかにする。

したがって、本書をつうじての論旨は、タイ政府が戦後、賢明な自由為替管理政策をとってきたことの高い評価にある。それを裏づけるために、豊富なデータが駆使されている。わたくしはその論旨には、だいたいに賛成する。ただ、この自由管理政策を実行しえた背後にある政治的安定と、中国系タイ人のタイ化政策の成功とがあげられなくてはならない。この点からい